

ケアするローカル研究所 in くるめ DAY1を開催しました！

バケツをひっくり返したような土砂降りの雨を窓の外に見ながら「ケアするローカル研究所 in くるめ」のDAY1がひらかれました。今回の記事では、10月4日（土）に久留米大学の地域連携センター「つながるめ」で実施されたレクチャーの内容と参加者のみなさんとの対話の内容を詳細にレポートします。



「ケアするローカル研究所 in くるめ」ってなんやろ？

まず、そもそも「ケアするローカル研究所 in くるめ」というのは、どんな企画であり、どんな活動なんですか。告知のためのパンフレットに掲載されている文章を添付してみます。

—

ケアのある地域は、いい地域。ケアのある地域は、きっと豊かな関係性のある地域。

「ケアするローカル研究所」は「地域にあるケア」と「ケアのある地域」を両面から考え、学び、地域で実践していくためのゆるやかなコミュニティです。福祉に関わる人もそうでない人も、誰かをサポートすることが多い人もサポートしてもらう人が多い人も。いろいろな人が混ざって考えていくための場です。

—

という触れ込み。ううむ、わかるようなわからないような。

この取り組みは、久留米市の地域福祉課による主催事業（支え合うまちくめ コミュニケーションプログラム事業）として実施されているのですが、目的としてはこの事業をきっかけに地域福祉や地域活動に興味を持ってもらって、自分なりの一歩を踏み出してもらうこと。ただ、地域福祉や地域活動と言ってもちよっぴり、いや結構堅くなってしまうので、ローカル（地域）にある「ケア」をどのようにして楽しく育んでいくことができるだろう？というテーマで、さまざまな学びと小さな活動・アクションを進めていくコミュニティ活動として動かしています。



パンフレットはとってもかわいい猫のイラスト。参加者の方の数名は、猫のイラストだったから目に留まって参加することにしたんです、とおっしゃる方も。

今回のDAY1は、そのキックオフ（はじまり）の日。大雨によって本当に足元が悪い中でしたが、たくさんの方が集まってくださいました。参加してくださった方は、福祉の世界でガッツリ奮闘されている方、一般企業にお勤めの方、あるいは学生まで非常に幅広です。また、年齢も20代から80歳近い方までさまざま、世代も所属も背景も非常に多様！という印象です。

冒頭は、久留米市地域福祉課の課長である下津浦さんの挨拶から。

「地域福祉はわかりにくいと言われます。でも、住民同士の助け合いや自治会・住民活動を通して、ずっと昔から地域の中でそれぞれに支え合ってきた背景があります。現在、それらが少なくなっている課題が出てきて、制度で支える仕組みが生まれましたが、その制度の対象にならない人もいます。近年になって、地域でのゆるやかなつながりや活動を通じたつながりなどが重要だということに気がついて、もう一度そうしたものをつくっていこうという動きがはじまってきました。

もちろん、制度を使う福祉も必要ですが、それだとその人の『課題』に注目したアプローチになりがちです。ネガティブなものに注目するからか、なかなか課題を解決したり軽くしたりできないこともあります。ですので、久留米市ではその人の『願い』に着目して、人とのつながりもつくりながらポジティブに応援し、一緒に進んでいくという関わり方をAU-formal（アウフォーマル）実行委員会が実施しています。実際これまでには、願いも叶った上に、その過程で課題も解決してしまったという事例が生まれてもいます。

ですので、ここに集まったみなさんの『こうしたい』『こんなことができれば』という『願い』が重なって、ゆるやかな関係性の中で楽しみながらなにかの活動がはじまるといいのではないかと思います。それが誰かにとっての福祉になりえますから」



クールに見える課長も実はとってもアツいんです。

地域のつながりを再編集すること。それがケア？

DAY1の話題提供は「株式会社ここにある」の藤本遼（ふじもと・りょう）さんです。今回の事業「ケアするローカル研究所 in くるめ」を受託している会社の代表を務めています。聞き手には、同事業をともに進めている「つくるのわデザイン株式会社」の代表である岩本諭（いわもと・さとる）さん。

関西人の特徴なのか、藤本さんは適宜笑いを散りばめながらお話しを進めていきます。最初のご自身の生まれの地である尼崎イジリからはじまり、その後は10年ほど前から活動してきたその背景と活動内容についても触れてくださいました。



関西人のさすがのまくし立て。テンポよくさまざまなお話をいただきました。

藤本さんは「場づくり（地域の人に関わることでできる機会や口実をつくること）」を軸に、さまざまな活動や企画を実施されています。

彼が取り組んでいる活動をいくつかピックアップすると、まず目を引くのが、お寺でカレーを食べるフェスのような取り組み「カレー寺」。その「カレー寺」は、最も多い時で1日で700人もの人を集めたそうなのですが、これは数百年あるそのお寺の歴史で2番目に人が集まった大変歴史的な瞬間とのこと。ちなみに、最も人が集まったのは江戸時代の打ちこわしの時のようです（時代が遠すぎる、）。というのはさておき、カレーという多くの人が好む食べ物をフックにしながらお寺に人を集め、檀家さん（お寺の会員さんのような存在。お寺を支える方々）と新しい方々との交流を生むという企画をおしゃれに楽しくやっていたり。



カリー寺はカレー好きな方から近所の方まで、いろいろな人が関わるきっかけになっています。写真の炊飯器は2升炊きのもの。フル回転でたくさんのお米をみんなで炊きました（ブレーカーも落ちました）。

また、まちの大型ショッピングモールでは、子どもたちが初めてのおつかいを体験できる「おつかいチャレンジ」という企画を大学生と一緒に定期開催していたり、子どもたちの憧れの企画「逃走中」に似せた企画を開催したり。その「逃走中」に似せた企画では、中学生や高校生、大学生のお兄ちゃんを中心に、中には60代や70代の「ハンター」も登場したとのこと。また、実際にテナントとして入っているお店や地元企業さんが集まりお仕事体験ができる「キッズハロワ！」という企画なども仕掛けているようです。



藤本さんらが企画した逃走中を模した企画。早朝のショッピングモールに50名の子どもたちが集まりました。写真はハンター役を務めた街のお兄ちゃんたち。

藤本さんは語ります。

「多様な人が関わることで、その企画やイベントにも幅と深みが出ます。同世代や同じ興味関心の人だけでやっても面白くないんです。普段は関わる人がいない人たちかもしれないけど、遊びを通して出会うことで、関係性が広がったり深まったりすることがあります。そんな入り口づくりをたくさんやってきました」



「カリー寺で面白かったのは、関係性の質が変わることです。普段は住職と檀家さんとしての関わりだったけれど、この企画を通して今までとは違う関係性ができ、コミュニケーションの内容が変わるということがありました。まちで場をつくり、場を開くということを通して、さまざまな関係性を編集し直すということをしているんです」

まさにそれは、ケアする／ケアされるという関係性を越えた、人と人の「ふつうの関わり合い」なのかもしれません。現代社会でどんどん失われていく、そういう普段の関係性をいかに構築し直すかというテーマに藤本さんは取り組んでいます。



参加者（研究員）の方は、講師の話をじっくり聞いたり、研究員同士で感想を話してみたり。インプットとアウトプットを繰り返すことで、学びや気づきをシェアしていきます。

「福祉」はいかに自分ごとになるのか？

「でもある時気づいたんです。なかなか障害のある人がイベントに来ないなと。障害がある人は『どうせ行っても困るから参加しない』って言うんです」

そうして藤本さんたちは、福祉制度には健常者と障害者が分断される側面もあるということにも気づいていきます。もちろん、種々の支援制度や福祉サービスは障害のある人たちの生活を支える上で、あるいは家族の生活をフォローする上で非常に重要なのですが、それがあがるゆえに「自分には関係がないもの」というような分断のようなものが生まれていくこともあります。

「だから自分たちから関わりに行くことにしました。呼ぶのではなく、自分たちから関わりに行こうと思いました」

尼崎市の福祉啓発事業として1982年から続いていた「市民福祉のつどい事業」を誰もが来られるイベントにするために自分たちで担いたい！と2016年に行政に働きかけたそう。藤本さんが活動している尼崎市には当時、提案型事業委託制度という制度があり、その制度を活用して事業を実施することになったそうです。

当事者やその家族、支援者に閉じていたように見えたイベントを地域に、当事者だけではない人たちにどんどん開いていった藤本さん。その過程で、反対意見や対立などもありましたが、その大変さも乗り越え、みんなで一緒につくる過程を大切に企画を進めていったそうです。



藤本さんらが取り組む兵庫県尼崎市の「ミーツ・ザ・福祉」というイベント。障害のある人もない人もたくさんの方が一緒になって楽しむことのできる企画です。

「『自分ごとにする』ということが大事だと思っています。関係がないと思っているものを自分ごとにするためには『問い』が必要です。どうやったらみんなで楽しめるイベントをつくれるだろう？という問いではなく、行っても困ることが目に見えているのでそもそもイベントに参加すること自体を諦めている、そんなふうにする人の問いと向き合ってはじめて、自分にはなにができるだろうと考えはじめる。そのように、普段自分だけでは問わないような問いに出会うことで、主体性が発揮できるんじゃないかと考えています」

藤本さんらが関わってから参加者の幅も格段に変わり、若い層や新しい人が参加するようになったそう。ゆるやかな実行委員会には障害のある人（特に若者）の参加も増え、イベントの参加者の数も約3倍ほどになり、新しいつながりがどんどんもたらされていきました。

「わたしたちの活動は今回のテーマである福祉領域のものもあります。しかし、つながりができること、楽しめる場所が増えること、思い出せる人ができること、地域で暮らすことに徐々に安心感が生まれていくこと。これらすべてが地域福祉なんじゃないか、とわたしは考えています」

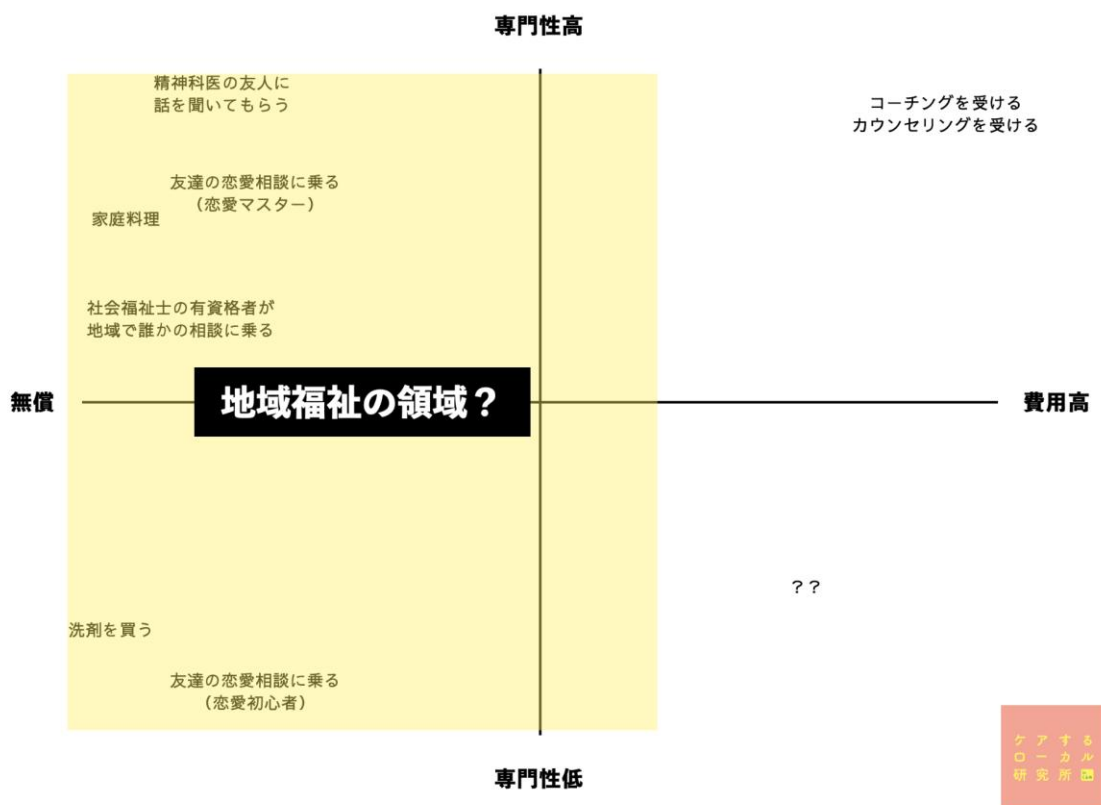
藤本さんからの話題提供の第一部が終わった後は、参加者のみなさんがグループに分かれて感想共有と意見交換を行います。小グループになって話すことで、徐々に関係性をつくっていくことも、今回の活動でとても重要。みなさん、積極的に意見交換を楽しんでいらっしゃいました。



「地域」ってどこだろう？

第二部は、社会福祉事業の起源や現在の介護福祉業界のトレンド、ケアの多義性の問題やケアが軽視されている（きた）社会状況などについてお話しがありました。特に藤本さんが強調していた内容としては、今回の取り組みは久留米市の地域福祉課の事業だが、地域とはそもそもどこなのか？どこのことを言うのか？という話題。

「当然、近所というのはイコール地域になるのですが、しかし地域＝近所という発想だとなかなかしんどい部分もあるのではないかと思います。現代は、そこまでエリアや物理的な距離だけに縛られているわけではありません。近所に知り合いが増えることは豊かなことでもありながら、時に煩わしさも生み出します。ゆえに「『ふだんの関わり』を地域だと拡大解釈することはできないか」との提言がありました。それは友達や会社の仲間たちとの関わり、趣味が共通する仲間たちも含む概念です。もちろん、近所の人も含みます。



藤本さん作成資料。地域福祉ってどの領域なんだろう？という問いかけ。無償から有償、専門性の高いものから低いものまでケアはいろいろな領域にわたるよねということを参加者の方と確認。

ううむ。「地域福祉ってなんだろう？」ということが聞けば聞くほどにぐるぐるしていきような話題提供でしたが、初回のインプットとしては非常に充実した内容だったのではないかと思います。

わたしのケアとあなたのケア

聞き手の岩本さんとのセッションも盛り上がりました。その中で「去年、会社経営で失敗を経験している」という藤本さんのネガティブな経験に触れるお話しも飛び出します。



聞き手の岩本さんから核心を突いた質問が。さすがのファシリテーション力です。この「聴く力」もケアにとって大事なのかも？

「ちょっと自己開示的になるんですが、これまで仲間をケアしきれていなかった、という反省があります。自分の価値観や考えを押し付けていた部分が少なからずあったのではないかと。楽しく期待を持って関わりはじめてくれた人が、最後にはそうではなくなるというケースを何度か経験しました。そういった苦しみの中で気づいたことは、もちろん、他者をケアできていなかったという反省ではあるのですが、もっと根本的に見ていくと、自分で自分をケアしていなかった、できていなかったという事実なんです。この事実気づいてから、自分との向き合い方や扱い方を本気で変えようと思うようになりました。そこから少しずつ変わったんです」



退職後、10年かけて自分の役割を見つけたという参加者のケンケン。素敵です。

地域にケアをつくるということの根本には、もしかしたら自分へのケア、自分自身との関わりがあるのかもしれませんが。そうした藤本さんの自己開示もあって、参加者のみなさんもどんどん自分の話を他のメンバーにしてくださいようになりました。

最終的に参加者のみなさんからは「初回だったけど、とても安心感を持てる場だった。自分らしくありのままでいいんだと思える時間だった」「聴くということを今後探求してみたい。ケアというものを考える上で、聴くということはなんだかキーワードになりそう」「人と人との交流が地域をつくっていき、ケアにつながっていくことがわかった」「役割や肩書きを外した自分自身の感情に向き合うことで、自分に優しくなることが相手に向き合うことにつながるということが学びだった」など、本当にたくさんコメントや感想をいただくことができました。運営メンバーも、とっても嬉しいなと思っています。



久留米市外からも何名か「地域福祉」や「ケア」というテーマに関心を持って参加してくださいました。みなさん、ありがとうございました！

さて、DAY2ではどんな話が飛び出すのか。次回は、久留米市内でゴリゴリ「地域福祉」を進めてきた先輩のお話を伺えればと思います。楽しみ。